

### 3・11「想定外」の虚構—問われる専門家の想像力

(柳田邦夫、「想定外」の罫、東京、文藝春秋社、2011、p.14-30)

2018年11月2日 災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

#### 1. 過去の記録が訴えるリアリティ

東日本大震災のエネルギーの大きさは M9.0。そして災害規模の巨大さ。この事実は防災対策を考える上で極めて重要な意味を持つ。今回の災害問題の規模を考えるために過去の災害資料を調べてみた。関東大震災、阪神淡路大震災、チェルノブイリ原発事故などについて、内容をチェックするうちに記録写真から受ける印象が、これまでになかったリアリティをもって迫ってきてテレビ中継を見ているような感覚にとらわれる。これらは今の時代と切り離された遠い歴史の中に封じ込まれた出来事ではないのだ。

#### 2. 起こる可能性のあるものは必ず起こる

歴史の中の災害が現在に繋がるリアリティを持つものだという事は、何を意味するのか。それは災害・事故の掟とも言うべき、次のような冷厳な摂理だ。

「起こりうる可能性があるものは、確率は低くても、現実には必ず起こる。」

だから災害対策においてはこの掟に対して真摯に取り組んだかどうか、問われるべき課題なのだ。しかし日本行政はこれを無視し、経済的に対応可能なところの上限で線引きして、万一それを上回る災害が発生すると「想定外」という一言で弁明する。

#### 3. 「想定外」という思考の枠組み

「想定外」とは一体何なのか。議論を進めるために3つに分類した。

- A 本当に想定できなかったケース。
- B ある程度想定できたが、データが不確かだったり、確率が低いと見られたりしたために、除外されたケース。
- C 発生が予測されたが、その事態に対する対策に本気で取り組むと、設計が大がかりになり投資額が巨大になるので、そんなことは当面起こらないだろうと楽観論を掲げて、想定の上限を線引きしてしまったケース。

これまでの様々な災害事例を見ると、ケースAはきわめて少なく、BかCが大半を占める。しかし、「想定外」の線引きは造る側の専門家と行政によって強行されてしまう現状がある。

#### 4. 問われる想像力と透明性

こうした「想定外」の問題を解決するにはどうすればよいのか。

第一に「まさか」というご都合主義から訣別すること。

第二に防災対策の基本的な前提条件となる地震・大津波の想定規模を、予算枠などから線引きする発想から脱却して、可能性のある最大のものにすると同時に、それによって生じる「できること」と「できないこと」を明示すること。

第三に巨大な地震・大津波に耐えられる原発の防護法や市街地の再建の基本的な構想をどうするか。

以上に示したように、発生頻度が小さくても、一度発生すれば重大な人的被害を生ずるおそれのあるものについては、対策の推進を図るべきである。そのためには東日本大震災でも見られた企業と行政が「想定外」という常套句によって事故の責任を回避してしまう、この国の伝統的な思考のパラダイムを転換しなければならない。